

仏の国スリランカに学ぶ



中野 良 教

スリランカ国立ケラニヤ大学大学院
研究所員（曹洞宗・東京都・東禪寺副
住職）。写真はシャムユッテ派大僧正
と共に

暑い国スリランカの朝は早く、日の出とともにに入び
とは村や町へと繰り出す。
コーランの唱和のひびきにも似た、パーリ聖典の声

高らかな、そして崇高な統経が街々に流れる。そうした中を、粗末な荷車にキングココナッツを満載して、「デカイ、パナイ!」「デカイ、パナイ!」と、売り子が高声に売りあるく。スリランカの一日のはじまりである。

これは、スリランカにおける私の生活のはじまりで

もある。

一九八三年、パーリ・テキスト・ソサエティ（P.T.S.ロンドン）の一員でもある、世界的に著名なパーリ語学者・ジャヤウイクラマ博士との出会いによつて、スリランカで修行する尊い御縁をいただき、当時、博士が教鞭をとつておられた国立ケラニヤ大学大学院研究所に推薦を賜り、そこに通学するかたわら、僧院において、南方上座部仏教の僧として、日々の弁道にはげんでいる。

この間、三カ年、ただ無我夢中で経過したといつても過言ではない。それは、同じ東洋とはいえ、気候風土も違えば習俗文化も異なる、全く異質の環境であり、

特に想像以上にきびしいのが食生活だった。しかし、こうした生活を投げ出して帰国する気にはなれなかつた。それは一体何なのか。私は自分自身に問い掛けた。

日々の生活にあつては、貧しい生活にあえぐ信者たちが、自らの貧しさをかえりみず財施をする姿だつた。

これは、エコノミックアニマルと蔑称される日本の社会では正に「未夢見在」「未夢聞在」のことである。

また不幸にして病魔に冒された時は、安居同修の手厚い法愛があつた。ここに私は難値難過の尊い仏縁に生かされている私を見出しさらにこの生活を続ける決意を新たにしたのである。

尊い仏縁に生かされて三年、いま私の周囲にはスリランカ内外の友人もふえ、まことに意義深い毎日を送つてゐる。

スリランカは、仏教の世界における宗家の存在である。歴史的にみれば、釈尊入滅後、紀元前三世紀、アショーカ王の王子、マヒンダが仏教をこの国に伝えて以来、衰退興隆を繰り返しながらも今日まで連綿とし



てパーリ聖典及びその精神を伝え、また、中世以降には、ビルマをはじめ、タイ・カンボジア等の周辺諸国に仏教を伝播せしめた。さらに近世に至り、英國の統治を機縁として前世紀後半より英語によるパーリ聖典の研究が緒につき、仏教が欧米諸国に根を張る基盤となつてゐる。

右のような歴史的経過により、最近においては、タイ・ビルマ・バングラデイシユ・韓國等の近隣アジア諸国の仏教僧や仏教研究の留学生はもとより、欧米諸国の研究者や比丘としての実戦修行者の数も他の仏教諸国に比して一段と多いように觀取される。

最近はまた、禪の教義や実践に興味と関心を示す当国人や欧米人に出会う機会が多くなり、禪の本場の日本人としての私を訪ねる人も少なくない。時には菩提樹の木かげやココナツツの林で共に坐することもある。正に「悉くも厚殖善根の良友に交わり、幸いに住持三宝の境界を拝す。亦慶快ならざんや」の感を深くしている今日このごろである。

最後に日本とスリランカとの仏教交流について一言すると、個人的にあるいは小団体レベルでの交流はたしかに活発になつてきているが、殘念ながらその多くは国際的な広い視野に立脚するものではなく、日本側の売名行為やエコノミックパワーによるものや、そしてスリランカ側の巧みな勧誘によるものが多く、目を掩いたくなる不祥事があり、また数多くのトラブルも発生している。その具体的には触れないが、その被害は、スリランカにわずかに残されている仏教文化や当国人の仏教によつて培われた心の純粹性を蝕み、さらには、日本の国際感覚の欠如を暴露する結果となつておりそれは、日本の望ましい対外政策の歯車を逆行させることであることは事実である。

さいわいにして私は当国に来て三年の歳月を送り、いささか当国歴史的風土的事情を垣間見ることができた。さらに事情のゆるす限り当国にとどまり、見聞をかさね、日本・スリランカの仏教交流の望ましいすがたづくりに微力をささげる所存である。